

共生型統一科学

菅原裕輝

日本学術振興会・京都大学文学研究科

共生型統一科学が目指すのは、科学の共生である。具体的には、細分化し断裂した現代の科学が共に知識生産を行うための、理論的・実践的基盤を構築することを目指す。本報告では、共生型統一科学の理念とその意義について論じる。

(1) **科学の共生の理論的基盤**は、①複数の科学の融合によって得られる「学際知」(Frodeman 2013 “Interdisciplinary, Communication and the Limit of Knowledge”)が、個別科学が生産する科学的知識よりも、科学全体の前進にとって決定的に重要であることや、②神経科学をはじめとする現代科学の多くが実際に生み出している知識が学際知であることを示すことにより、構築していく。

(2) **科学の共生の実践的基盤**は、現代科学の営みにおいて、知識体系が異なる科学者と協働することが、研究活動を成立させるための資金獲得などの側面からも重要になってきている現状を踏まえたうえで、知識体系は異なるが自分達の研究と密接に関わる研究を行っている研究者との間に強い繋がり（自然科学系の間だけでなく、人文・社会科学系と自然科学系の間にも強い繋がり）を作ることにより、構築していく。分野の縦割りによって構成された学会のような組織ではなく、分野に横の繋がりを作る場を個別の文脈（研究の目的／対象／方法）に応じて設ける必要がある。発表者はこれまでに、科学の共生の実践的基盤構築に向けた実践をいくつか行ってきた。俯瞰的な観点から科学を広く見渡し連環させることを生業とする科学哲学者（とりわけ、ワークショップ提題者らを構成員とする統一科学グループ）は、科学の共生（あるいは学際研究推進）において良い相談役になりえると考えている。

(3) **理論的基盤と実践的基盤をスムーズに接続させるためのハブ**として、科学者の認識論的規範に対する記述及び分析を用いることができる。科学者の認識論的規範とは、「科学者が知識生産において持っている規範」を指す。例えば生物学者の多くは（メカニズムを明確に定義しないのだが）様々な現象におけるメカニズムを発見しようとする認識論的規範を持っている（Sugawara and Nakao 2012 “Mechanistic stance: An epistemic norm among scientists”）。科学者の認識論的規範は、科学者の知識生産に関する規範を表したものであり、一方で科学者の実践を反映しているものでもあるため、科学者の認識論的規範の記述及び分析により、科学の共生の理論的基盤と実践的基盤が架橋されうると考えている。共生型統一科学は、様々な科学者の認識論的規範を顕在化させることにより記述・分析し、全ての学問分野に通じる共通基盤として据える。